

果樹共通事項

共通事項Ⅰ

ミカンキイロアザミウマ

Ⅰ 防除の狙い

1. かんきつ

ハウス栽培で発生し、露地栽培では特に問題にならない。被害はハナアザミウマ類による加害のように果実が果実や葉と接した部分に多く見られるが、加害程度がひどいものは果頂部から果側部まで全面に発生する。加害期間は果実が着色した頃から収穫までと長期間なので、果実の洗浄や青色または黄色の粘着トラップで発生消長を把握し、初期防除につとめる。本種は花に対する嗜好性が強く、花が重要な増殖源となるので注意する。

2. もも

ハウス栽培と露地栽培の両方で発生するが、本県ではハウス栽培のももで被害が発生している。被害は果実の縫合線や梗あ部に多く見られ、葉と果実が接触している箇所でも発生する。果実での症状は加害部位がかすり状脱色し、白色化する。葉での被害は奇形葉の発生や成葉のかすり症状が認められる。加害時期は果実の着色開始から収穫期までと長期間なので、果実の洗浄や青色または黄色の粘着トラップで発生消長を把握し、初期防除に努める。

3. その他の果樹

他県では、ハウス栽培のぶどうやかきで被害が確認されている。

Ⅱ 防除法

1. 発生源を少なくするため、周辺およびハウス内の除草を徹底する。
2. 外部からの飛来が主な発生源となるため、施設開口部に1ミリ目程度の防虫ネットを張り施設外からの侵入を防ぐ。さらに、ハウスミカンにおいては、天井部フィルムに近紫外線カットフィルムを使用し、アザミウマ類の密度増加の抑制を図る。
3. 薬剤防除
 - (1) 発生が多くなってからの防除では十分な効果が得にくいので、早期防除を徹底する。
 - (2) 本種は薬剤がかかりにくい部位に寄生していることが多いため、十分量を丁寧に散布する。
 - (3) 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照 みかん、かんきつ、もも

共通事項Ⅱ 薬剤耐性菌、抵抗性害虫対策

薬剤耐性菌・抵抗性害虫の発生を避けるため、同一薬剤、同一系統の薬剤の連用、過剰使用を避ける。薬剤の効力低下がみられた場合は他の薬剤、他系統の薬剤により防除する（各薬剤防除一覧表の「作用機構による分類」を参照）。

また、薬剤以外の防除手段にも積極的に取り組むことも重要な対策である。

殺ダニ剤の特性

薬 剤 名	化学組成 (IRAC) 分類	効 果			残 効	速 効 遅 効
		殺 卵	殺 幼 若 虫	殺 成 虫		
マシン油乳剤95%	FRAC NC	○	○	○	○	中
〃 97%	FRAC NC	○	○	○	○	中
〃 98%	FRAC NC	○	○	○	○	中
粘着くん水和剤	—	×	○	○	△	中
エコピタ液剤	—	×	×	◎	△	中
アカリタッチ乳剤	—	×	○	○	△	中
コロマイト水和剤、乳剤	6	○	◎	◎	○	速
ニッソラン水和剤	10A	◎	△	×	◎	遅
バロックフロアブル	10B	◎	◎	×	◎	遅
オマイト水和剤	12C	△	◎	○	○	速
ダニカット乳剤 20	19	○	◎	◎	◎	速
カネマイトフロアブル	20B	○	◎	○	○	速
ダニエモンフロアブル	23	◎	◎	○	◎	遅
ダニゲッターフロアブル	23	◎	◎	△	◎	遅
ダニサラバフロアブル	25A	◎	◎	◎	◎	速
スターマイトフロアブル	25A	◎	◎	◎	◎	速
ダニコングフロアブル	25B	○	◎	◎	◎	速
ダブルフェースフロアブル	25B、21A	○	◎	◎	◎	速
マイトコーネフロアブル	20D	△	◎	○	○	速
サンマイト水和剤	21A	○	○	○	○	速
ダニトロンフロアブル	21A	×	○	○	○	速
アーデント水和剤	3A	×	○	○	△	速
ロディーくん煙顆粒	3A	×	◎	○	△	速
フロンサイド S C	FRAC 29	◎	○	△	△	遅
コテツフロアブル	13	○	○	○	○	速
メビウスフロアブル	6、10B	◎	◎	◎	◎	速